光源氏論への一視点（三）

日向一雅

3（承前）

前稿において、第一部の物語は家の遺志の実現を構造化していったと考えた。そこで、家の遺志は具体的には遺言に結実して、あとに残されたもののたちの生きかたを喫労したはずなのであった。だが、そうした物語における家の遺志の反映としてあったというようなものでもなかったと思われる。桐壺更衣の場合が典型的な例である。桐壺更衣の場合は、その皇子を生み、その皇子の立廃位にあたるものではなく、また単純に歴史的な現実の外祖父として摂関の地位に就くことなど、まったく不可能な夢であった。更衣の出仕が大納言の死後のことであったからである。のちに、更衣のたった一人の兄も出家して、桐壺更衣の塔様を振る可能性もまた閉されていた。大納言の遺言はその意味で現実的な権勢の獲得を自己目的としていたというより、家の没落が自明の境遇において、すぐれて情念的な名門復興の意志の発現であったという。
典全書本による）を抱き続けているらしく、その限りではかれが娘の内内とその所生の皇子によって、みずから外祖父として接関にほることを夢想したことのあたったことは否定する必要はない。しかし、臨終において娘の宮仕えの完遂を説いてやまなかったのは、それにによってすでにかれの家が権勢家たるうる現実的な条件をもっていなかったという点で、宮仕え志向がきわめて心情的な間隔にほかならないことを示している。

紫君の母ももう一人の按察使大納言のひとり娘であり、他に男の兄弟もいなかったのである。それは明石入道にも共通する。入道じしんが再び貴族社会に返り咲くことはありえないのに、大納言はこの娘の内内を念じたのであった。ここでも事情は変わらなかったである。しかし、外祖父の嫡男による外威としての権勢の伸長を期待できないのであった。内内や結婚に家の命運を賭けたとはいえ、前者には直系の嗣子が初からいなかった。にもかかわらず、摂関家と同じ後宮内閣をめざしたことは、家の繁栄や権勢の獲得を摂関家と同時史的実地に根ざしたなお、それは物語の固有の論理として定着されたことは、家の流行や権勢の獲得を摂関家と同時史的実地に根ざしたのではなく、それが物語の固有の論理として定着していたと考えられる。

家の遺志が物語の独自の論理に変わりえていたとすれば、それは光源氏の人生にどのようにかかわっていたのであろう。藤井貞和氏は桐壺巻の予言には在衣の家の遺志が参与している。予言は在衣家の家業の遺志の実現をはかるかに示し、のらせたといわれた。ということは、源氏は予言を生かされることで、同時的に母の家の遺志をも生かされたということである
光源氏の人生は家の人遺志に貫かれており、かれの栄花は大納言と更衣の遺志を成就し、もってかれらの鎮魂をま
ところ、光源氏の人生はもう一つ、予言に支えられ、導かれていた。いうまでもなく、予言と家の遺志は同じであるから、内容的に一方が運命に対し、他方は式平安時代社会における歴史的現実的な意欲化した表現である。機能的にも予言が光源氏を光源氏を支える根拠として、物語の構想および情勢における根幹位に位置したのに対し、家の遺志はその後までの一力ももたなかったと思われる。両者は源氏の人生を同じ比重で支えているので、相対的に独自な位相をもっていたのである。

ところで、予言に家の遺志が相互に影響していること自体は、予言のことがそのもののからようには明らかにならない。ということも、予言の意味がいくえにも隠されていたということではなかった。家の遺志は予言に基づくが、そこに家の遺志が介在していることを解釈していたのであろう。桐壺巻の予言はまずそうした遺跡の表現として読んだ。

この御子を湯落ちに遣はしたり、御後見ちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率て奉の、相人おどろきて見れば、乱れ憂ふる事やあらむ。おほやけのかためとなりて、天下を輔る方にて見れば、またその相違ふべしといふ。
ここで相人がしきりと「あやしゅ」は、右大弁の子とは思わぬ言葉。この子に見たからであるはずだ。相人の不審は光君の帝王の相の紛うかたないかとも、その方向で観る乱雑が透視されるということにあった。決して臣下を決めるべきである。「朝家の補佐として」ならば、帝王の道を歩ませることは断念するのではないか。桐壱帝の決断はまずそこであつてあろう。これは光君を帝王たるべき器量を確信するゆえに臣下としたからである。

ここでの「世の中長々つべき相」、「世をたもつ」という例は、源氏物語の中で源氏物が臣下として世の中を治めてゆく相である。そこで、「世をたもつ」という意味を示す。源氏物語の中で源氏物が臣下として世の中を治めてゆく相がある。この傾向は大鏡に非常に顕著である。文徳、清和、醍醐、朱雀、冷泉、円融、花山、一条、三条、それに臣下としての道長に限って使われている。なかには、「世をたもつ」という大鏡では陽成、
光孝、宇多、村上、天武、臣下として基経、忠平、兼家、道兼等に使われ、「世をまつりこつ」とは時平、道貞、伊呂保、周、頼通、道長等に使われている。大鏡で人臣に「世をしらす」、「世をまつりこつ」と使うのは、摂政あるいは間白をする意味であるが、「世をしらす」と使うのは、摂政あるいは間白をする意味であるが、「世をしらす」や「世をまつりこつ」と区別されるところがあったのではないか。原則として臣下に使うことのない語であったのではなかろうか。とすれば、ここで桐倉院が源氏は「必ず世の中を治めてゆける相にある人なのだという帝室」としての相と治世能力を強調したのであったと思われる。

そのような光源氏の帝王の相に対する確信とその器量への信頼や評価は、現実に臣下としたこと、しかもそれを「行

先も預めなめる事」と（桐倉院一七八頁）と判断したということ、どのようにかかわるのであろうか。そこ Indo 弘徽殿との暗闇に引きつけて受けとめられていたらしい形跡が顕著であることからすれば、それを臣下とする

文に弘徽殿との暗闇に引きつけて受けとめられていたらしい形跡が顕著であることからすれば、それを臣下とする

ことで乗り切った得には、光源氏が朝廷の後見としての実績により、のちに冷泉帝が譲位を提案したように、親王に向

かたえはならないが、「世をしらす」や「世をまつりこつ」と区別されるところがあったのではないか。原則として臣下に使うことのない語であったのではなかろうか。とすれば、ここで桐倉院が源氏は「必ず世の中を治めてゆける相のある人なのだという帝室」としての相と治世能力を強調したのであったと思われる。

そのような光源氏の帝王の相に対する確信とその器量への信頼や評価は、現実に臣下としたこと、しかもそれを「行

先も預めなめる事」と（桐倉院一七八頁）と判断したということ、どのようにかかわるのであろうか。そこ Indo 弘徽殿との暗闇に引きつけて受けとめられていたらしい形跡が顕著であることからすれば、それを臣下とする

ことで乗り切った得には、光源氏が朝廷の後見としての実績により、のちに冷泉帝が譲位を提案したように、親王に向
帝王の相は確信していたらしい桐壷帝には、そのような期待がおのれ一人の胸奥にはあったのでなかったよう。それ故、桐壷帝の即位についての南衡の言葉『薄雲二十一二五九月』と源氏は即位の可能性をかたかったことがないらしいことである。ただ、人思い出せる御心を思い、『薄雲』二十一三五頁と源氏は帝の処置を回顧する。また、故院の御説、中略では、なにからなに迄のことを考えることは許されるかと思われる。

これに対し、相人は光君の帝王の相と乱顛との不可分離な相そのものの謎を超えたのであり、光君が臣下で終る相の相こそされたいを解きえない謎と論じている。これに非難される、また三代の相に天人の生れかわりを求めるとき、きわたった特色である。予言はまるで謎として投げ出されたものである。天人の生れかわりを求めるためには自分のさかんを差し掛かしはさむことをせずに、娘の結婚は『天道』にかなせたのよ。
どの矛盾を指すのであった。帝王たるべく立坊するなら乱冬に突き当たって、臣下となるなら帝主の相にそぐわず、だからである。さきに検討したように、桐壷帝は光君を源氏としながら遠い将来に即位を展望した（と解釈した）
が、そもそも桐壷帝の秘めた望願であったにすぎず、源氏とした時点で光君の即位は客観的には既に決まっていた。ずっと後年源氏が通達したように、「ただ人に思いつく御心を
思いに、宿世遠くありや（源氏）」ということであり、臣下の身分から王権に到ることは、さきにみた。それは異例ではあれ、貴族社会に例のある方法
で王権に到る道であった。ただ物語はそうした方向をめざさなかったのである。藤壷との密事を考えたことがある。貴族社会の日常的な現実の中にあって
の実現が光君の所有した帝主の相であったからだ。それが予言の真意であった。光源氏はその謎を生かしたのである。

予言が謎であったことは物語の構想および構造に対して、どのような意味をもっていたのであろうか。これまで家
の遺志を第一の物語の基軸とみなしながら、しかし、それは予言にこれを引き込むものであって、予言こそ物語の
構想と構造の根幹に位置すると考えておいた。そのことを概略検討してみる。
予言が構想の中心に位置しただろことは、予言が本質的に謎であった点に求められる。源氏が帝王の相にそむいて臣下として出発したこと、しかもかれの帝王の相が藤壇との密通と冷泉を媒介にして実現する非日常的な王権であったことは、いわば予言の実現は古代物語の鉄則であったからである。『宇津保』の例に照らしても、予言はほどまちがいない実現されるねばならなかったのである。高橋和夫氏は予言に導かれた一貫したプロットと、その拡大及び増補、挿入が物語の長編化を可能にしたといわれたが、従いたい。予言は物語の長編的構想の根幹であった。いかにして王権に到るか、その王権がどの様の性格のものであるか、予言はそうした構想を導きふくらませていたと考えられるからである。

そしてこれらの予言が第一部の物語の構造の根幹であったことは、阿部秋生氏が詳細に検討された。氏に従えば、第一の物語は古代伝承物語の型によるものであり、その骨格は藤壇紗のちの三つもの予言によって形成されていた。源氏の物語は源氏の文体、物語の長編化及び構想の根幹を形成し、他に述べたように源氏の文体は源氏の文体と関連する一部の骨格が形成しているといわれた点は、そのおりであろう。これに対し大滿雄氏は、源氏物語の長篇の骨子として藤壇のことも一つの分身として創り出される紫君に関する長篇的要因を見落すわけにはいかないと思われる。第一部といえども必ずしも予言に支配される物語とは断然はず、源氏物語の長編化及び構想の根幹があったと考えられる。
壺系、詰木系という区別を批判し、詰木系の長編的構造を積極的に掘り起こし、全体としての長編的構造の把握をめざそうとするところにあると思われるが、逆に予言の長編的構造を過少評価することになったのではないか。次のようにもいわれる。「事件に附随して予言が語られるのであって、決して予言を導かれて事件が展開するものでない。」

日記的時間の持続の創出が長編構造の根幹であるということは、物語の長編性を成り立たせる方法の析出であったと思われる。そうした方法が予言のならむ長編化の契機を否定したり軽視することにはならないのではないか。氏の立言とは逆に予言に導かれて事件が展開するのではなく、また予言が単なる物語の外枠の規定にすぎないのでもなく、予言を根拠としてあれば母胎として事件が分泌されるのである。それは光源氏の帝王の相を実現する階梯として藤壺事件が準備されたというような単純な事件の分泌にとどまるのではない。そうではなく事件の意味に目覚め、それに胸うめき心陰せるともなる非常の事件である。仮に予言をとりはしてみればよい。相人の予言がなくとも光君は臣従低下したかも知れない。しかし、この予言に加えて、藤壺が懐妊した時の夢見せをもたなかったとも。源氏は帝王の相の予言を知っていったにあらゆる。相木はそうであったようにである。

不義に恐れ混の男でしかあれないのかはあらゆる。木を信じたところどう生きることがその実現につながらなるかは知るよしもないからである。琴の家の先祖になるとかなりの予言された俊隠が、娘が生まれるともまたやすく琴の伝授のために宫職を辞したようなら、予言に導かれた生き方、
の自明性は源氏には与えられていない。そこで予言が謎として設定された意味がある。かえって自己に忠実に生きるはかないのだ。したがって源氏は破天荒なわけをされでなかったのである。この犯しによって冷泉が生まれ、その時の夢合せを相入の予言を考えさせた時、はじめて源氏は破天荒なわけをされでなかったとするが、秘密の子が、父帝の皇子と偽されたまま、皇太子になり、やがて皇位を譲るであろうことについて、長年の念を強め、「以後、子氏によれば、冷泉誕生以後の源氏は以前にましにわが身を、重んずべきものとして、自負の念を強く、彼を内側から輝かせている」というのも、氏のいわれるとおりである。相人の予言は身天子になるべき器量を自覚し、「その後の自覚が、を啓示として信じなかったとすれば、入道は存在しなかっただろうからである。入道の存在しなかったからこそ、源氏の予言は明石家の数奇な栄光を超える力を感じていた人々の想い」となりえた根拠は予言にあったのである。

ちなみに明石入道のあいだに考えられている。そこでも事件に付随して予言があったのでなかった。夢の告げ、スポンブル語の予言は物語の枠として事件を自在にむぎ出す手段にすぎないというようなものではない。その人物の内面において予言は生きられるのであった。つまり予言は人物の内面において生きられることがによって、予言に導きかけられた事件といえども、外在的超越的に人物に臨君することなく、その事件を人物の内なる生の一環に組みこんだ
などである。そのようななかで第一部の物語は予言を構造化していたと考えられる。以上は通説に対する私なりの再確認である。

ところで、三つの予言は必ずしも同じ位相にはない。各子言はそれぞれ相異なる相関をもつが、おのおのおの物語世

界に占める位置は異なっていた。とりわけ剣条内の予言は剣条、若紫の巻の予言にくらべ独自の面があると思う。

まち、『桐壷』と『若紫』の子言は形式的にはよく対応している。前者における帝君の相と乱騒に対し、後者におけ
る天子の相とがい目というようににある。そして帝君の相が譲権であるにせよ、この両者の呼応はきわめて密接である。他方、乱騒と

たがい目は、たがい目が源氏の須磨退去であることが明確であるのに、ここでの両者の呼応はきわめて密接である。むろん実質

的も精神的な乱騒、心憂も、国家の乱騒とも、須磨退去事件とも、さまざまなに解釈されている。またそのすべてだ

とみられなくもないのであって、限定が困難な点、帝君の相と天子の相の関係ほどには具体的で緊密な呼応とはいい

がたいものだが、乱騒の延長線上にたがい目が置かれていると考えてよいであろう。こうした呼応の相関をもって、

この二つの子言は緊密に結ばれていた。ただしこれに含まれる射程範囲は若紫の子言が、須磨、明石から冷泉の即

位する巻巻とは限定されるのに対し、桐壷の子言は形式的には『藤原集』で源氏が準太上天皇となることで

帝田の相尾を完成するのであり、こちらは第一部の全体をカバーしていた。
これら二者に対して潰標巻の予言は、乱憂やたがい目の予言を含まないこと、光源氏の運命を直接に予言するのではなかった。かかる子太政大臣の予言は、潰標巻の即位によってその信憑性が保証されたから、明石で生まれたばかりの姬君を後任として育てねばならない準備を、源氏にさせるためであったという意味が考えられる。しかしこの予言はそれだけのためにあったのではない。明石姫君の誕生は一方で明石入道の悲願の実現へ向けた大きな進展であった。即ち、この予言は入道の家の遺志の実現を保証するはずなのである。更衣の家の遺志が潰標巻の予言に家が源氏の家を確実に実質的に成就し、自家の家を確実に実質的に成就したことを確認するものであった。それは同時に源氏に賜われた家族の間題にすべて実質的な解答を与えたのだから、明石入道の巻にもながら、潰標巻の予言はその家がその遺志が将来にわたって確実に報われるだろうことを意味した。こうして潰標巻の予言は源氏の家を源氏の帝家の相と、そこに関与していた家が選ばれた家その家が選ばれた家その家を実現するということができる。
の時点で大きな画期を迎えたのだ、と書いてよ。深沢三千男氏のいうように、冷泉の即位によっ、光源氏は実質的に皇統入裏を果たしたのであろう。六条院の造営はかれの八後宮形成を意図するものであったにちがいない。準上天皇位は光源氏の特異な王権を名実ともに完成するものであった。

こうして栄花の変容を登りつめていく源氏には一点の憂いもなかったが、その中でかれは次のような述懐をしている。

いまは、せば常なきものに世を思い、今こそおとならば見とら、なぜならば、宮に高きのぼり、世に抜けぬる人、長く保たぬわざなりけり。この世には、身の程覚え過ぎたり、中頃なきになりて沈みたりし憂へにかはり、今でもよからふれ、と述べる。かつては宮をも延べ、と思はし、山里のどこなるらを占めて、御堂をささげる。

（絵合）二二八一頁）
源氏が藤壺との犯を宿業として恐れていたことは、はやく若紫巻にかたられた。わらわ病みの治療に北山に行き、仏都から現世の無常なこと、後世のことなど説き聞かされた源氏は、「わが罪の程おぞろしけ、あぢかきなきこと心をしめて、生ける限りこれを思い出むべきなり」と、心を決めて、藤壺の宿業しさえも、多屋良俊氏のいわれたとおりである。あさましき御宿世の程心憂し（同上、三一日四頁）とかたられた。「心憂き身」といえども、藤壺は出家し、源氏は須磨に退去するというように、東宮冷泉を守るために、かれらは不可抗力の宿世の罪障に支配されていたものとして導いたのである。藤壺は元々、源氏の御代をたしかにおはしまさば（賢木一二〇五頁）と念じて勤行に精進したようして、源氏も「心憎ぎなきにしても、藤壺の不帰にしても、戦苦の不罪なさるやいかはかし、東宮の安楽のためであるが、それだてでなくかれらが自分たちの不義をいただく恐れていたからである。藤壺が「畏れずやうしく思わしうるぎ聞きき向かえせ給へ事しえば」（賢木一〇五頁）と、源氏との一件を恐れたように、源氏のいえ}}
「ふれ」が東宮冷泉の出生にまつわる秘密であることは明らかである。かれらが東宮の安泰のために真に恐れたのは、自分たちをとらっていた宿世の罪障といえるものであった。阿部秋生氏のいわれるように、二人の前世から荷ってある罪障が東宮の地位を危くししてあるのである。だから、東宮の地位を安泰にしようとするとならば、これを軽めてゆるし給え、「仏を念じて」（賢木）（一五頁）たのは、そのような論理に基づくことを明快に示しているのである。東宮の罪は本来藤壇に発し藤壇に属するゆえに、かの女の減罪の努力を代償として東宮の安泰を期そうというのである。その点で事情は源氏にとってもまったく変るところはなかっただろう。藤壇が「われに磨」（三町頁）と、全面的に同感したのであった。このように二人の進退、恐れ、祈りは完全にあい呼応し軽らかにすることを命じていたからである。僧都は「仏天の告げあるにように奏し侍るなり」（薄雲）（三七頁）と、密奏が私意によるものでないことを強調していた。その僧都のかたるところによれば、藤壇は冷泉の懷妊時から祈祝をささげていた。源氏の秘密は世間に漏れないように、また源氏の恋慕の情を顧みず、あらゆる罪障を消去する事を祈願したのである。
を、静めさせるために行なわせたのであろうともいわれ、この重ねての祈禱は、源氏との秘密を隠し、東宮の地位安
泰をはかる目的で行なわれたのであろうとはいわれる。藤壷のここうした祈禱を知った源氏もあらためてこの同じ僧都
に祈禱させ、それらは冷泉の即位の時まで続けられたのである。おそらくこの祈禱は藤壷と源氏のみずからの滅罪
のための勤行精進とは性格を異にするのでであろう。一方はみずからの内なる罪障を消すことにより重ね
子の安全をはかることを第一義とするというようなものであったのである。冷泉内と両面の祈りによって東宮の地位はあくまで守られたのである。一方はみずからの内なる罪障を消すことにより重ね
であったのだと思われる。僧都の祈禱に倣うだけでは事態の好転は望めず、藤壷と源氏の自発的な祈り消滅がなければ
そうした冥界への恐怖が栄花のさなかにあって、源氏を出して、「しずかにこもり居て、後世の事をつとめること
とに志させたのだと思われる。かれは藤壷との犯しとそこに黒した罪障の深さに対して深い恐怖をいたいたのであろう。

冷泉帝が、瞑位の意向を表明した時、源氏は氷と眩く恐ろしい思いして、さらにあるまじきよしを申し返し道
（薄雲。三三五頁）ただでなく、任大政大臣の定めもしばらぐ延期し、親王にとの勧めも辞退して、事情が許すよ
うになったら「ともかくも静かなるさまに、と思しきる」（同上、三三六頁）のであった。最後は「太上天皇に応ら
ふる御位」（藤藻葉。三三四五頁）を得るのだが、じしんの即位そのものは一貫して「さらにあるまじきこと」
（落標。九頁）と考えていた。それは「ただ人に思いを養てきる心を思ふに、宿世遠かりけり」（同上）と述懐

— 43 —
したように、「故院の御志」（『薄雲』三本五巻）として即位はあるべきでないということなので、決してそれはす
べてであるのではなく、源氏じしんの意志として、四国の方針がどうであろう、みずから即位には深いためらいを感
じていたからであるだろう。即位への一線を越えることはどうしてもできなかったのだ。即位を固辞し、反対に一
静かなるさまに」と願う根拠は罪障の深さに対する恐れにあったと思う。
こうして光源氏の王権の物語はかれに生涯にわたる報いの謎を課していたのである。そのことには源氏は十分自覚
的であったようにみえる。かれは罪障の消滅を終ることのない持続として果そうとしていたらしいからである。
当たるものであり、源氏の実現がかれの宿世にほかならなかったとすれば、源氏はみずからの宿世が稀有な栄
光の裏側に罪障の犯しをかかえ込んでいること、言いがければ、宿世の犯しの上に実現した栄花であること、そうい
う自分の宿世のパラドックスに懸命したのであろう。かれには栄花の拡大がそのまま罪障の深さの露呈を映したので
はないのだろうか。そんなに栄花に自足できない不安や後めたさが罪障を消す努力に源氏を赴かせたのであり、かれ
はその努力を惜しまず、自覚的な償いを生涯の課題としたのである。
ところで、こうした宿世の罪障への恐れと裏腹に、現実の犯しに対する源氏の罪悪感の乏しさが指摘されている。
たとえば前掲清水氏は、『冷泉誕生を境として、それ以前は、一源氏は父帝を怖れ、世間を懸り、報いを覚悟している
が、『中略』皇子誕生ののち、この線は次第に薄れてゆく。今、秘密の子が、父帝の皇子と隠されたまま、『中略』や
がて皇位を進むであろうことについて、畏怖や疚しさを感じる箇所は、ほとんど書かれない（23）といわれる。
ここに明らかな矛盾があるとするすれば、罪障への恐れを読みとることが誤解であって、元来源氏には犯しに対する罪
意識が不在であったということなのであろうか。また、宿世の罪障の自覚と犯しに対する罪悪感とは別個のもので
あって、罪悪感を欠落したまま、宿世の罪障を痛感したということなのであろうか。あるいは、犯しに対する罪悪感があたらない？

このあたりがよくわからないところなのだが、今西ぼう一郎氏は、光源氏の密通に対する罪意識を親密な間柄にある人間を裏切ったという負い目意識として存在し、それは仏教的罪観念（宿世の罪）とは「根本的に異質なもの」であるとといわれる。たしかにこの二つは異質なものであろうが、しかし、無関係に併存したのではあるまい。両者は同

の犯しに対する罪意識の二つばかりかたを示しているのであろう。しかし、無関係に併存したのではあるまい。両者は同

らわってこないが、裏切りの罪意識はそれを起点として、宿業を思わせるというかたちである。宿業の意識は裏切りの意識に

かもしれないことを認めてよいのだが、しかし、それはただに光源氏の罪意識の不在とか消失を意味するのではない。光源氏の Cruise が、ひいては源氏物語の罪意識の不徹底やあい

を示す心のなかに輝いていたのではなかったかといわれ、明石物語と光源氏の設定の中にも、『家のために家を復活を念願す

作者の』という夢想が一贯して織りこめられていることが推測できる」と論じられた（『源氏物語賞論』、古川書房、昭和四}

— 45 —